

2021年度
地球環境『自然学』講座
第1回

テーマ

地球倫理と未来世代の権利

講 師

地球システム・倫理学界会長顧問

服部 英二 先生

2021年4月10日

認定NPO法人・シニア自然大学校

講師プロフィール

服部 英二（はっとり えいじ）



1. 経歴

1934 年生まれ。京都大学大学院にて文学修士。同博士課程単位取得後、仏政府給費留学生としてパリ大学（ソルボンヌ）博士課程に留学。

1973～94 年ユネスコ本部勤務、主席広報官、文化担当特別事業部長等を歴任。その間に「科学と文化の対話」シンポジウムシリーズ、「シルクロード・対話の道総合調査」等を実施。94 年退官後、ユネスコ事務局長顧問、同官房特別参与、麗澤大学・同大学院教授、国際比較文明学会 ISCSC 副会長等を歴任。

2. 現職

麗澤大学国際研究所客員教授、地球システム・倫理学会会長顧問、比較文明学会名誉理事、非営利一般財団法人京都フォーラム至誠塾長、NPO 法人世界遺産アカデミー理事、世界ユネスコ協会・クラブ連盟名誉会長。

3. 受賞歴

1995 年フランス政府より学術功労章オフィシエ位を授与される。

2010 年全国日本学士会よりアカデミア賞を授与される。

4. 著書

『文明の交差点で考える』（講談社現代新書 1995 年）、『出会いの風景－世界の中の日本文化』（1999 年）、『文明間の対話』（2003 年）、『文明は虹の大河』（2009 年、共に麗澤大学出版会）、*Letters from the Silk Roads* (2000), *Deep Encounters* (2009, 共に University Press of America)、『対話』の文化』（鶴見和子との共著、2006 年）、『未来時代の権利－地球倫理の先覚者、J－Y・クストー』（編著、2015 年）、『転生する文明』（2019 年、共に藤原書店）、『地球倫理への旅路』（2020 年、北海道大学出版会）ほか。

服部英二 講演レジュメ

地球は悲鳴を上げています。大宇宙を漂うこの青い惑星に生命系が誕生してから38億年、いま母なる地球は人類の重さに耐えきれない状況に陥りました。2015年のパリ協定で全世界が対処すべく合意した気候変動はもはや気候危機の相を帯びています。

問題は300年前の西欧に発し、やがて世界文明となっていった科学主義、理性至上主義の抱いた機械論的世界観に在ります。それは600万年の人類史から見ると、何と2万分の1の時間帯に起こったことです。

17世紀、宗教から抜け出した理性は、科学革命を起こし、「自然との離婚」という間違いを犯しました。「人間は自然の所有者であり、主人である」というデカルトの言葉が端的に物語るよう、自然は人類に統御されるべきもの、開発されるべき資源となりました。森に神宿るとする文明は野蛮とされ、森を伐る文明がよしとされました。その結果、21世紀に至り、人類の横暴による生態系の破壊と気候変動が起こり、この水の惑星に生命の大量破壊を招こうとしています。それは人類自身にとっても黙示録的展望と言えるものです。

今回私は、地球環境学の先覚者ジャック＝イヴ・クストーを取り上げて、その警告

「人類が今その方向を変えなければ、地球はイースター島の運命をたどるであろう」という言葉の意味を皆さんと共に考えたいと思います。また1992年のリオデジャネイロ地球サミットにおいて採択された「生物多様性条約」、2001年のユネスコによる「文化の多様性に関する世界宣言」に、私自身がユネスコで発足させた「科学と文化の対話シンポジウムシリーズ」が如何に関わって居たかを報告します。

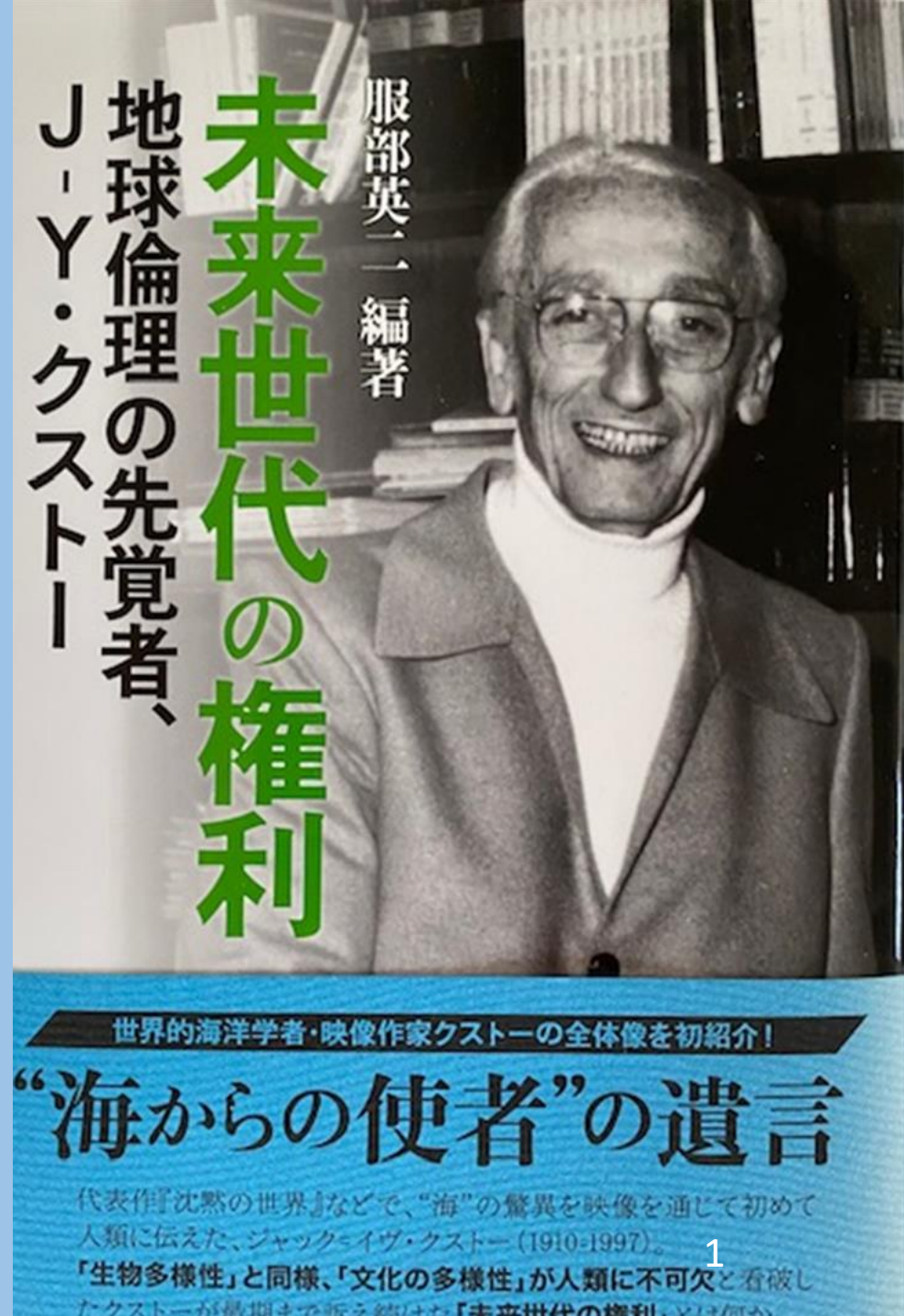
いまは人類が、存在よりも所有に価値を与えた「力の文明」がもたらした分断と排除の論理を抜け出し、「おかげさまで」を知る「命の文明」に立ち返るべき時です。人は自然の所有者ではなく、自然の一員であることを自覚し、すべての命は「万有相関」の相、すなわち相互依存の関係にあることに気がつかねばなりません。「結びつき」が大切なのです。その視点から日本における有明海の問題、3.11の後、東北地方に造られた巨大堤防の問題についても私自身の見解を明らかにします。

シニア自然大学校の地球環境「自然学」講座
2021年4月10日 ZOOM

未来世代の権利と地球倫理 —J=Y・クストーに学ぶ—

国連教育文化科学機関・元事務局長顧問
服部英二

2021/4/10



黙示録の時代

「世界は人類なしで始まったし、
人類なしで終わるだろう」

クロード・レヴィ＝ストロース

**「もし人類が今の方向を変えないならば、
地球はイースター島の運命を辿るであろう」**

ジャック・イヴ・クストー



イースター島、1772年の復活祭の日、
オランダ艦隊が発見

椰子の木さえない裸の島。ラパ・ヌイ（大島）
数百人の住民が細々と暮らしていた。

しかしそこには驚くべき文明の跡があった。
累々と横たわる石像・モアイ、巨大な頭部。
短い胴と足。目は虚ろ。

何が起こったのか？
2世紀にわたって議論が続く。

- ノルウェーの探検家ヘイエルダールは、1947年、「コンチキ号」という筏で、南米からイースター島を目指し、モアイを作った民族の起源を南米アンデス文明に特定しようとしたが、失敗。

- 今では、彼らはやはりポリネシア人、その出発点はマルケサス諸島、3世紀頃と特定さる。

- モアイは祖霊、目には白珊瑚と黒曜石、帽子をかぶっていた。





モアイはアフ（聖域＝タヒチ島ではマラエ）に立ち、内陸の子孫達を見守る。スラウェシ島、トラジャ部落のタウタウと同じ。



スラウェシ島のトラジャ部落、レモ村の岸壁に並ぶ「タウタウ」

イースター文明の消滅

初めは数10人であったはずの住民は、17世紀には2万人にも増えた。

8メートルを超す巨大なモアイを切り出し、運び、建てるには高い技術力が存在したはず。

ラノララク山に残された未完のモアイは21^{メートル}。

生きるための戦争

その17世紀に住民の大量虐殺が起こった。何故か？

ハナカ・エエペ（耳の長い部族＝統治）とハナカ・モモコ
（耳の短い部族＝労役）の抗争
⇒ルワンダのツチ族・フツ族の抗争（1995年）に似るか？

互いに相手のモアイを引き倒し、**マナ（霊力）**を発する目を
踏み砕いた。

島民の大半は南米に奴隷として連れ去られた。

クストーはこの文明の滅亡の真因を究明、断定した！

「樹を伐ったからだ！」

陸と海をくまなく調査したクストーは
＜海が死んでいる＞ことを発見。

森が伐られ、川がなくなり、里も、海も死んだ、それが
食糧危機を引き起こしたと断定。

森・里・海の関連を明示した。

「新型コロナウイルスは、人類への警告」

1 万年前、ホモサピエンスが農耕・畜産を始めてから
地上の森の70パーセントが消滅

生態系は大きく変った。

毎日120種の生物種が姿を消している。

Stuart L. Pimm (Duke University)によると、
「生物種は人類が存在しなかった場合に比して、
1000倍の速度で消滅している」

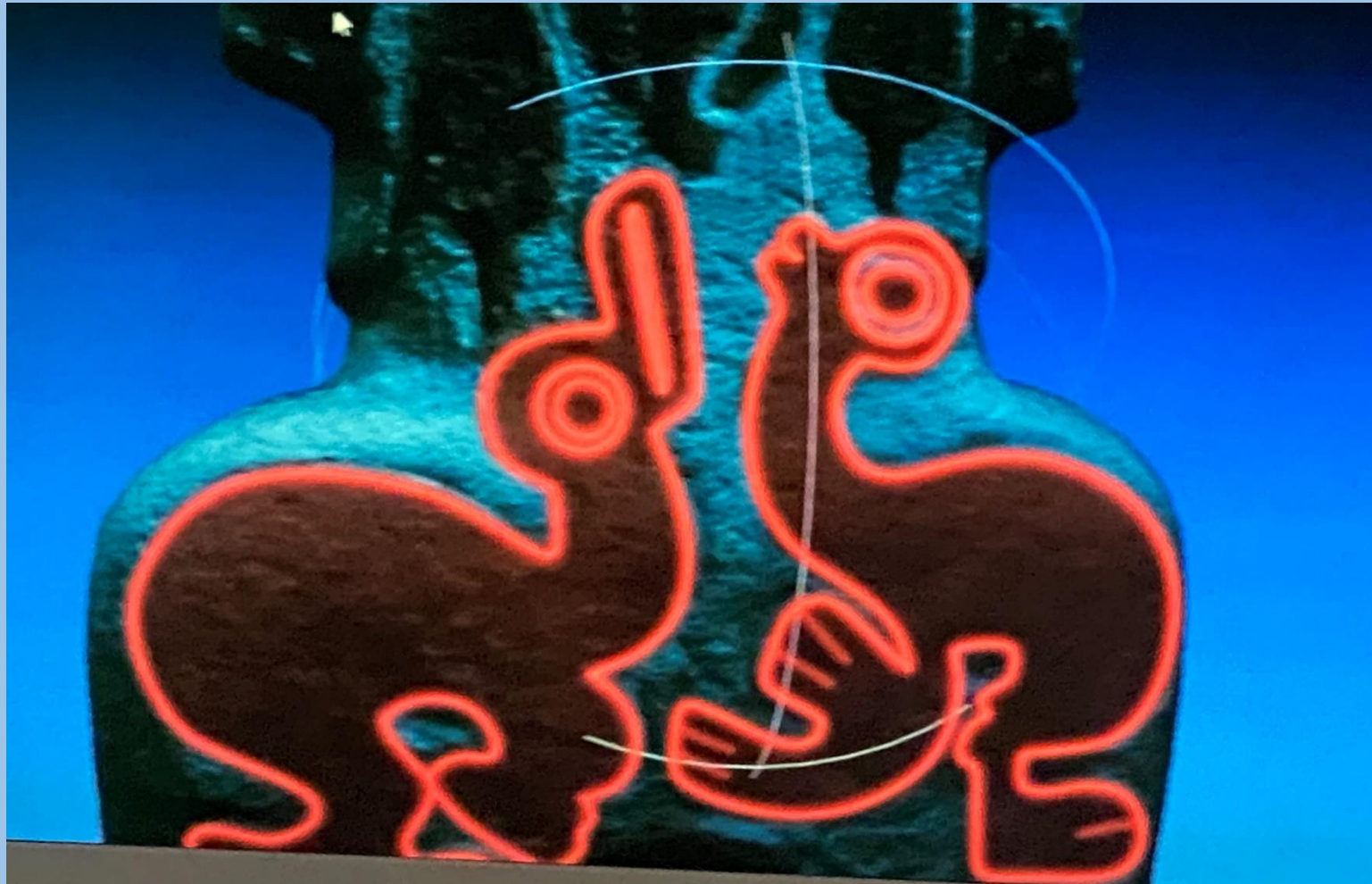
鳥人信仰

最後に残されたモアイに見る鳥人の模様

岬に掘られた「鳥人の図」が、島民の運命を語る。

「鳥になってどこかへ行きたい。」

・ ・ ・ アメリカ人の火星移住計画は違うのか？





ジャック＝イヴ・クストー

(Jacques-Yves Cousteau 、1910年6月11日 - 1997年6月25日)

フランスの海洋学者・地球環境学者

1930年にフランス海軍に参加。潜水用の呼吸装置スクーバ（商品名:アクアラング）の発明者として知られる。
水中考古学の嚆矢。

調査船カリプソ号で海やそこに住む生物の研究を行う一方、それを書籍、記録映画にして一般への啓蒙活動も行った。深海を扱ったドキュメンタリー映画『沈黙の世界』（1956年、レイ・マルとの共同監督）はカンヌ国際映画祭で最高の栄誉であるパルムドール、そしてアカデミー長編ドキュメンタリー映画賞を受賞した。日本では、1970年代から1980年代にかけてのテレビドキュメンタリー番組『驚異の世界・ノンフィクションアワー』（日本テレビ系列）で放送された、自身も出演する『クストーの海底世界』シリーズで知られる。

1957年、海軍大佐で海軍を退役し、モナコ海洋博物館長に就任

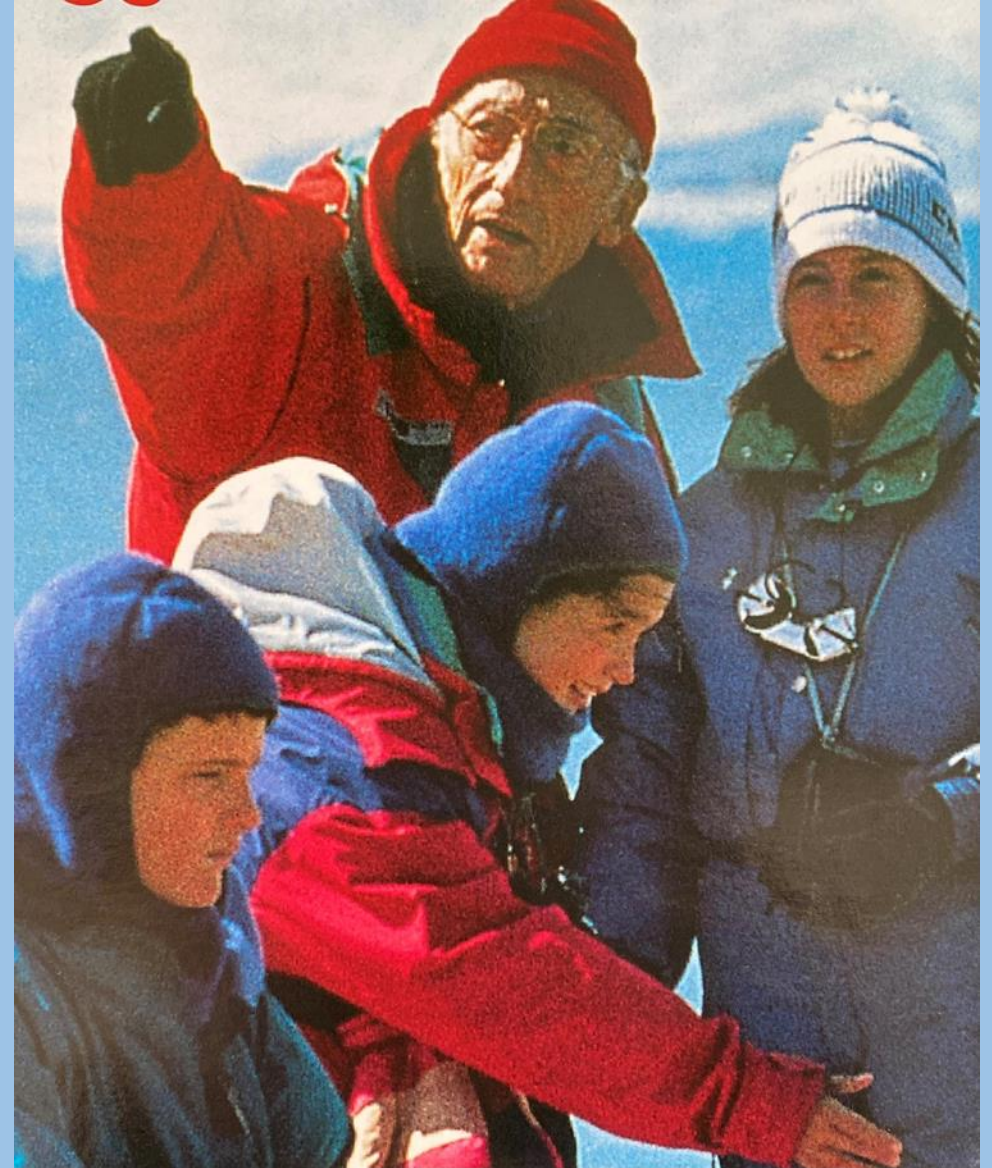
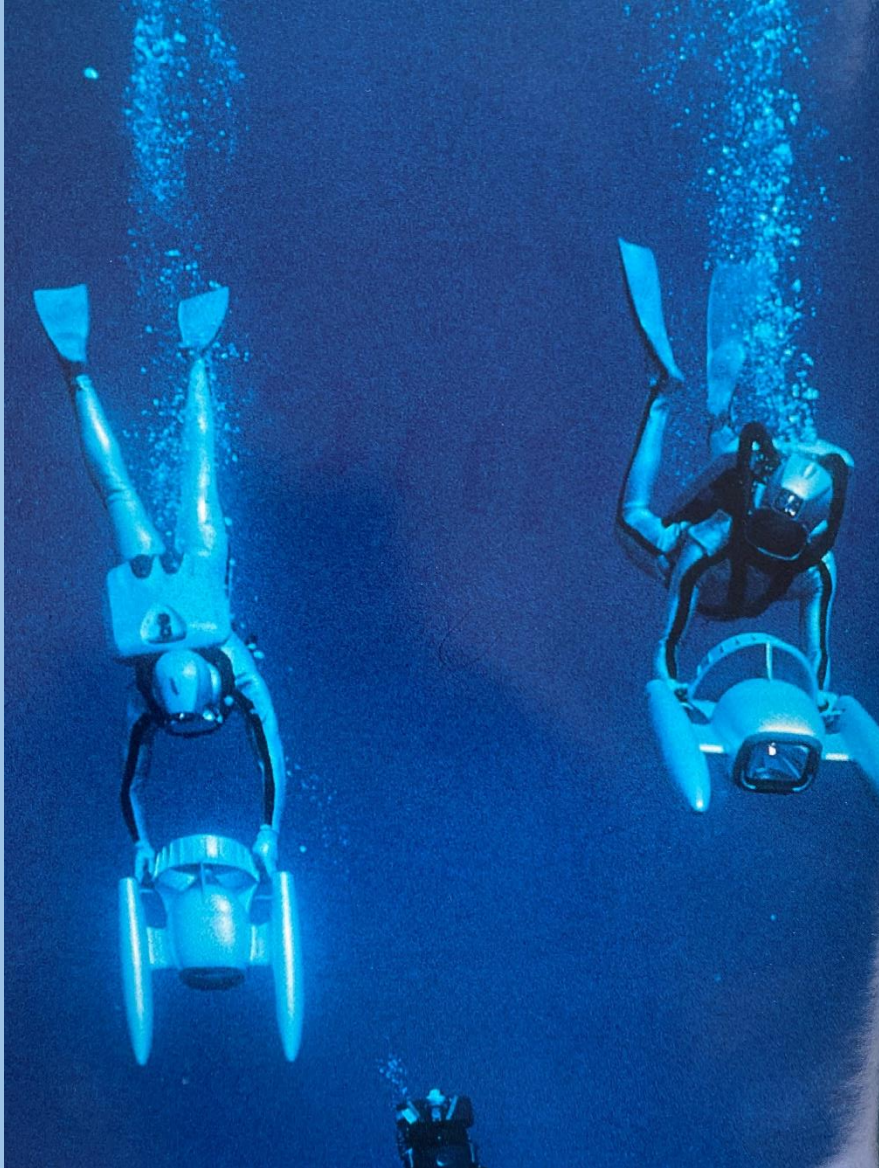
1959年海の国連と呼ばれる世界水中連盟CMASを創設。

1992年の地球サミットで環境破壊・海洋汚染を警告した

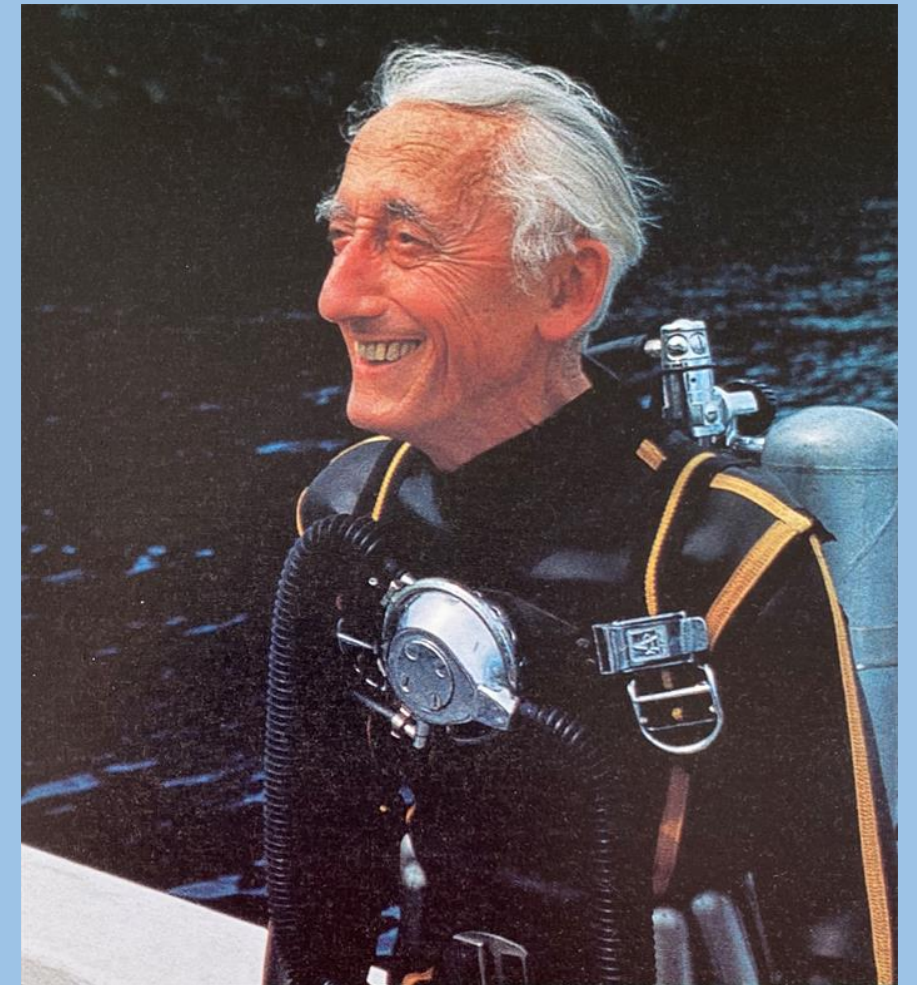
1990年、南極の資源開発禁止条約の成立に貢献

1991年より「未来世代の権利請願運動」世界で800万人の署名を集め、UNESCOの宣言に繋がった。

1995年母国フランスの核実験再開を激しく批判。







**You're invited to join
The Cousteau Society**

論壇



服部 英二

二十一世紀最大の課題は、地球環境だといわれている。日露の手にしても大自然の美しい映像が映し出され、その保護が訴えられている。なかでも神秘的な海の世界は、一人のフランス海軍士官の大胆な発案によって、万人の目に初めてとどくこととなった。その人はジャック・イブ・クストである。

カリプソII号建造に参加しよう

二十世紀最大の発明であった。クストの探求心はとどまることを知らず、数年前には深海潜水艇、さらに海中の家を次々に建造させていく。ハリウッドも驚嘆した彼の「カリプソ」は世界のほとんどの海・河川を調査し、七十を超えるドキュメンタリー映画となって計百四十カ国で放映されている。

主張・解説

ところが、環境を考へ海洋を愛するものによって心の旗艦であったカリプソ号は、この一月、シンガポールで沈没事故を起こした。米国の旧海軍を改造したこの木造の調査船は、南極に五大大陸の形を運び、地球の未来を開いた。カリプソ号の南極調査は、数年前のサトウ・会談で、南極大陸の地下資源開発

たのは、日本でもオーストラリア人でもなく、フランス人であるクストだった。このことは、日本では余り知られていない。しかも二人は、シラク氏がパリ市長当選からの長年の盟友であったのだ。

昨年秋、国連教育科学文化機関(ユネスコ)創立五十周年のNHK衛星放送番組「地球の未来に生きる」に出演、平山郁夫東京芸大校長と対談したクストは、仏米先頭に世界に三十万の会員をもつ「スト・ソサエティ」の日本人の設立を訴えた。環境とは何ぞや、ただ守るべき「対象」ではない。自然環境の破壊がそのままだけは、人類もまた、存続の危ぶまれる種のリストに名を連ねる。その危機感が

七三年、仏、米の「スト・ソサエティ」設立につながった。

人間問題は今後、当然大きな位置を占める。しかし文化の問題は常に大きな比重をもつてくるのではない。か、今のうちに、世界各地に同じような文化が広がる「文化のスーパーマーケット化」が進むと人類はどのようなか。

これについてもクストの発言はまことに鋭い。昨年東京で開かれたシンポジウムで彼はこう言っている。南極のように種の数の少ない所に種の数多ければ生態系は強い。そしてこの現象は、そのまま文化にも当てはまる。

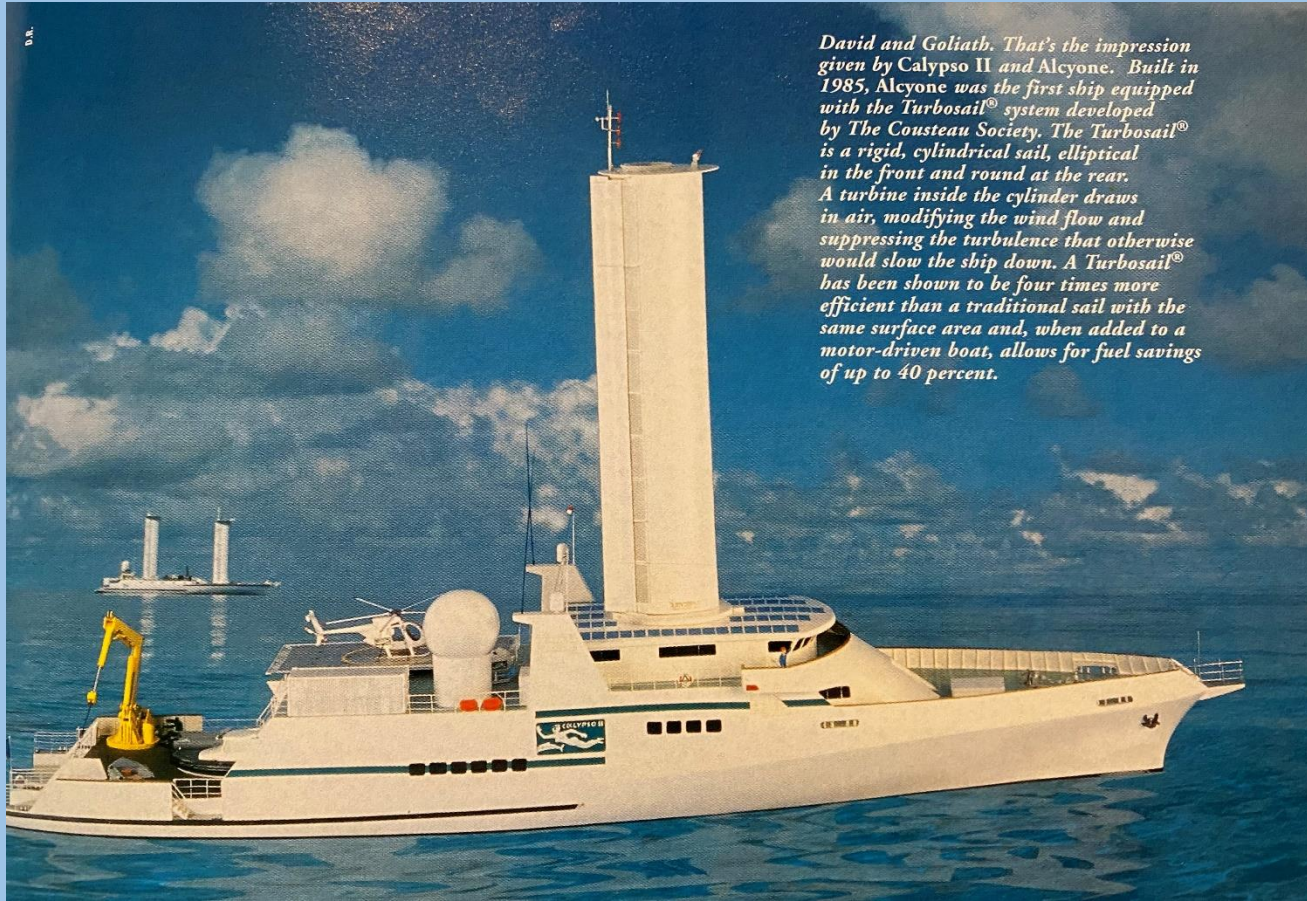
文化の多様性の保持は、単なる異文化の尊重ではなく、人類の存続をかけた問題となっているのである。ユネスコの「人類の遺産」という概念が、文化と自然の双方を含んでいるのを踏まえている。

日本の「スト・ソサエティ」は十一月、東京で第二の発起人会を開いた。その目指すところは①自然と共生してゆく生涯教育の科学的に根拠のある情報提供の提供と精進だ。環境科エコロジネットワークの確立である。

ドイツのワイツェカ前大統領は、「日本は、人口問題と環境問題でこそ躍り出る」と語っている。国連平和維持活動(PKO)ではないのである。

「未来世代が美しい地球を享受する権利」を訴えているクストとともに、今こそ「カリプソII号」をつくる。二十億円といわれる建造費金を各国ともに集めるだけでは、日本のハイテクがそこに集められ、環境保全の象徴となれば、世界の高い評価を受けるに違いない。

(ユネスコ事務局長顧問、日仏教育学会理事 投稿)



David and Goliath. That's the impression given by Calypso II and Alcyone. Built in 1985, Alcyone was the first ship equipped with the Turbosail® system developed by The Cousteau Society. The Turbosail® is a rigid, cylindrical sail, elliptical in the front and round at the rear. A turbine inside the cylinder draws in air, modifying the wind flow and suppressing the turbulence that otherwise would slow the ship down. A Turbosail® has been shown to be four times more efficient than a traditional sail with the same surface area and, when added to a motor-driven boat, allows for fuel savings of up to 40 percent.

1996年3月の朝日新聞の論壇での論説。

ーークストーリーの探求は、
「沈黙の世界」から出発したが、やがて海
の生態系と陸の生態系の関係性に移って
いった。

TV番組「世界再発見シリーズ」は、CNN
の配給、100カ国で放映さる。

1995年の出来事

クストーの、「未来世代は美しい地球を享受する権利を持つ」との「未来世代の権利請願運動」は、1990年代全世界で800万人の署名を集めた。

盟友シラク大統領は、クストーを議長とする「未来世代の権利国家委員会」を設立した。

しかし、1995年冒頭、フランス政府がムルロア珊瑚礁での核実験（核実験禁止条約の発行直前）を発表すると、クストーはそれに抗議し、政府からの役職を全て辞退すると宣言した。未来世代の権利国家委員会議長の職も辞めざるをえなかった。

「Message from Tokyo」を発信した。 東京シンポジウム「科学と文化：未来への共通の道」

1995年、UNESCO創立50周年・国連大学創立20周年記念事業として開催。

- ◆基調講演に大江健三郎、ジャック・イヴ・クストー
- ◆参加者：エドガー・モラン、ヘンリー・スタップ、カール・プリブラム、河合隼雄、中村雄二郎、鶴見和子等

未来世代の権利の請願書

人口過剰と人間の過剰な経済活動はわれわれの子孫たちにとって深刻な脅威となっている。

万人に自由と平等を宣言した人権宣言は二百年前に書かれたが、いまやこの素晴らしい文言も充分ではない。

われわれは、すべての人々が、汚染されていない、いのちが花咲く地球を継承できるよう、未来世代の権利が公式に宣言されることを、厳粛に要求する。

第1条：「未来世代は汚染されない地球を地球を継承する権利を有する」

第2条：「地球は未来世代から信託されている」

第3条：「生命、自然のバランスを重視せよ」

第4条：「教育・研究・法制化の要」

第5条：「未来世代が現存するかのように行動せよ」

1997年、UNESCOは「未来世代に
対する現代世代の責任宣言」を採択

——東京というトポスが生み出した奇跡——（後述）

「われわれはUNBORNと共に生きている」

1992年、Belem (ブラジル、アマゾン河の河口)で
開催されたシンポジウム **ECO-ETHICS**における
アフリカ代表の言葉

未来世代の権利の請願は ・ ・ NationalからInternationalへ ・ ・

1995年の国連大学での東京シンポジウムに於けるマイヨールとの会談の後、UNESCOがこの事業を継承し、
1997年の「**未来世代の権利のための現代世代の責任宣言**」
になった。



◆マイヨールUNESCO事務局長、デソーザ国連大学長の
開会したこのシンポジウムから、重要なUNESCO宣言
が生まれる。

・ **1 9 9 7 年**

「未来世代のための現代世代の責任宣言」

・ **2 0 0 1 年**

「文化の多様性に関する世界宣言」

1995年の東京シンポジウムでのクストーの発言が、2001年の重要な「**文化の多様性に関する世界宣言**」になった。

◆クストーの基調講演

「生物の種の多い所では生態系は強い。種の数が少ないところでは生態系は脆い。**この法則は文化にも当てはまる！**」

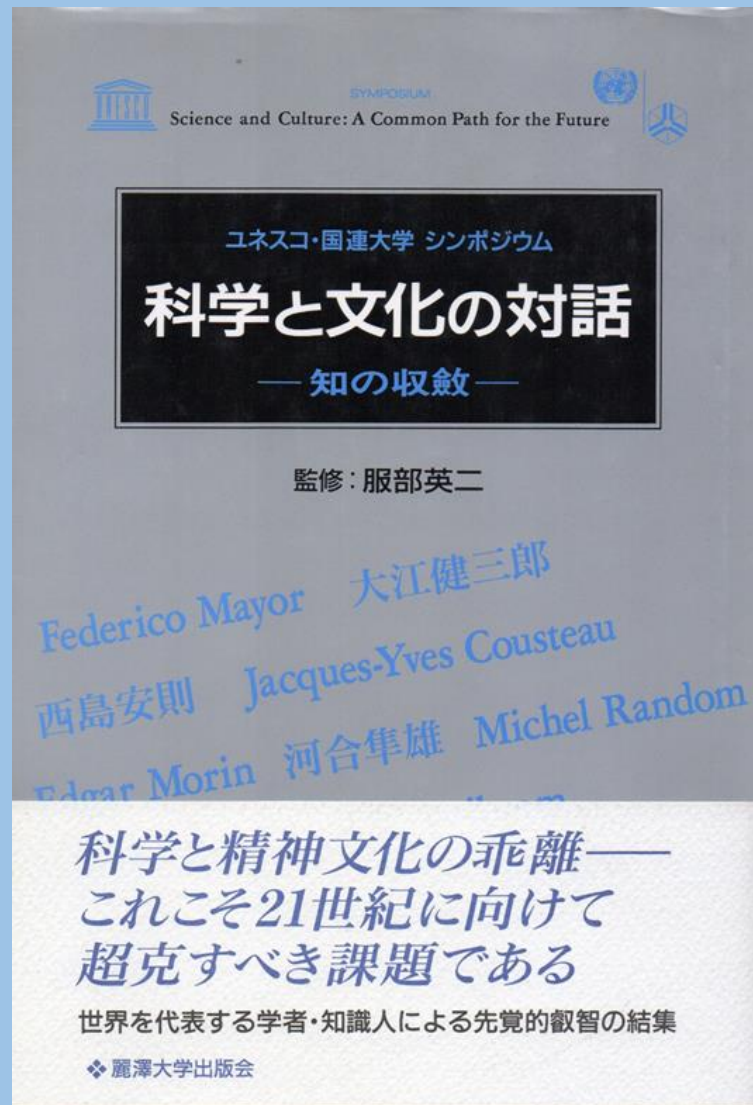
◆文化の多様性に関する世界宣言：第1条

「人類にとって、文化の多様性は、自然界に生物多様性が必要なと同じく、不可欠である。」

レヴィ・ストロースの証言

(2005年、UNESCO憲章採択60周年祈念式典で)

「生物多様性と文化の多様性は単なる類似現象ではない。それは有機的に結びついている」



※東京シンポジウムの全容を収録

「全は個に、個は全に遍照する」

カール・プリブラムとヘンリー・スタップが起草した「東京からのメッセージ」

宇宙にはかつて古代の知恵が抱いていた自然観に近い(全一的秩序)**Wholeness**が存在することを発見した

This new holism recognizes the enfoldment of the whole in its 'parts' and the distribution of the 'parts' over the whole.

この新しいホリズム（全一観）は、全体には部分が包含され、部分は全体に行き渡っていることを認識する。

ETHICA MUNDIALE（地球倫理・Global Ethics）

1997年のバレンシア・シンポジウムで、ドイツ・チュービンゲン大学の神学者**ハンス・キュング**が提唱。

「すべての宗教は、信仰の対象ではなく、倫理の次元で収斂する」と説く。

「過去2000年のイメージは飛ぶ矢であった。我々はそれを星座のイメージに変えねばならない」

文化の多様性の尊重を説く（**ウンベルト・エーコ**）



「普遍」 Universalへの疑問

「国際会議に行くと、そこに普遍という黄金の尺度が惹かれていて、なかなか其れを越えられない」（山折哲雄）

「新世界秩序は死産児であった。我々が如何に努力しても、文化的障害を越えられない。（マーディ・エルマンジャラ）

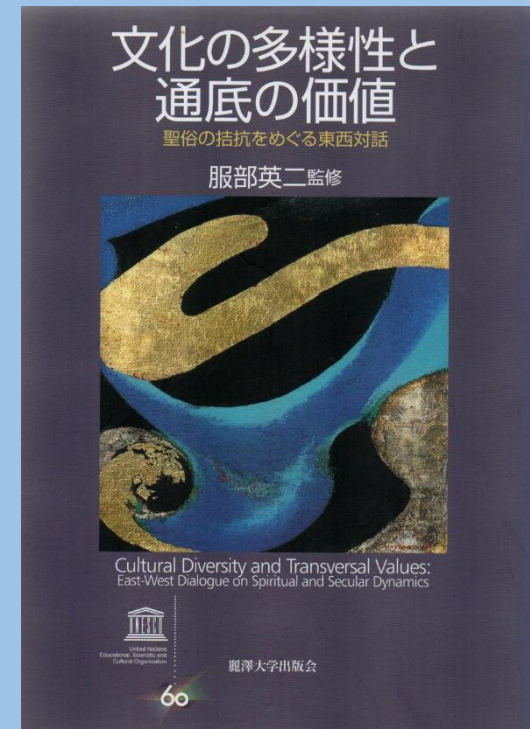
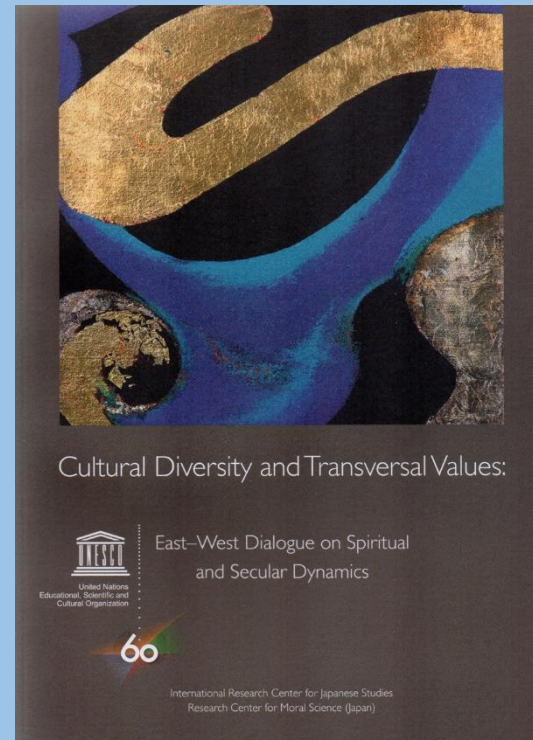
UNI（ひとつに） VERSO（向かう）・・・一見素晴らしいことに見える。

しかし、**その一つがあらかじめ定められていることが問題**。その一つとは、「論理的・男性的・西欧的」なもの。

通底の価値（Transversal Values）の提唱

2005年 「文化の多様性と通底の価値」シンポジウムをUNESCO本部で開催。
文化の多様性を尊重しつつ、文明間に通底する価値の存在を探る。

———UNESCO（文化局・社会科学局）、日本政府常駐代表部、外務省、文部省、国際日本文化研究センター・国際交流基金、公益財団法人モラロジー研究所等 が協力。



人類の地球環境問題への覚醒

◆ 1972年

- ・国連による第1回地球環境会議：ストックホルム
- ・ローマクラブの報告書『成長の限界』
- ・UNESCOによる「世界遺産条約」の締結（自然科学局MABが主導）

◆ 1992年

- ・リオデジャネイロ地球環境会議。通称地球サミット
（最初はUNCEだったが、中国とインドの介入によりUNCEDとなった経由）
- ・「生物多様性条約」の締結。21のAction plans→SDGs

1984年 ブルントラント委員会
(World Commission on Environment and Development)
の報告に

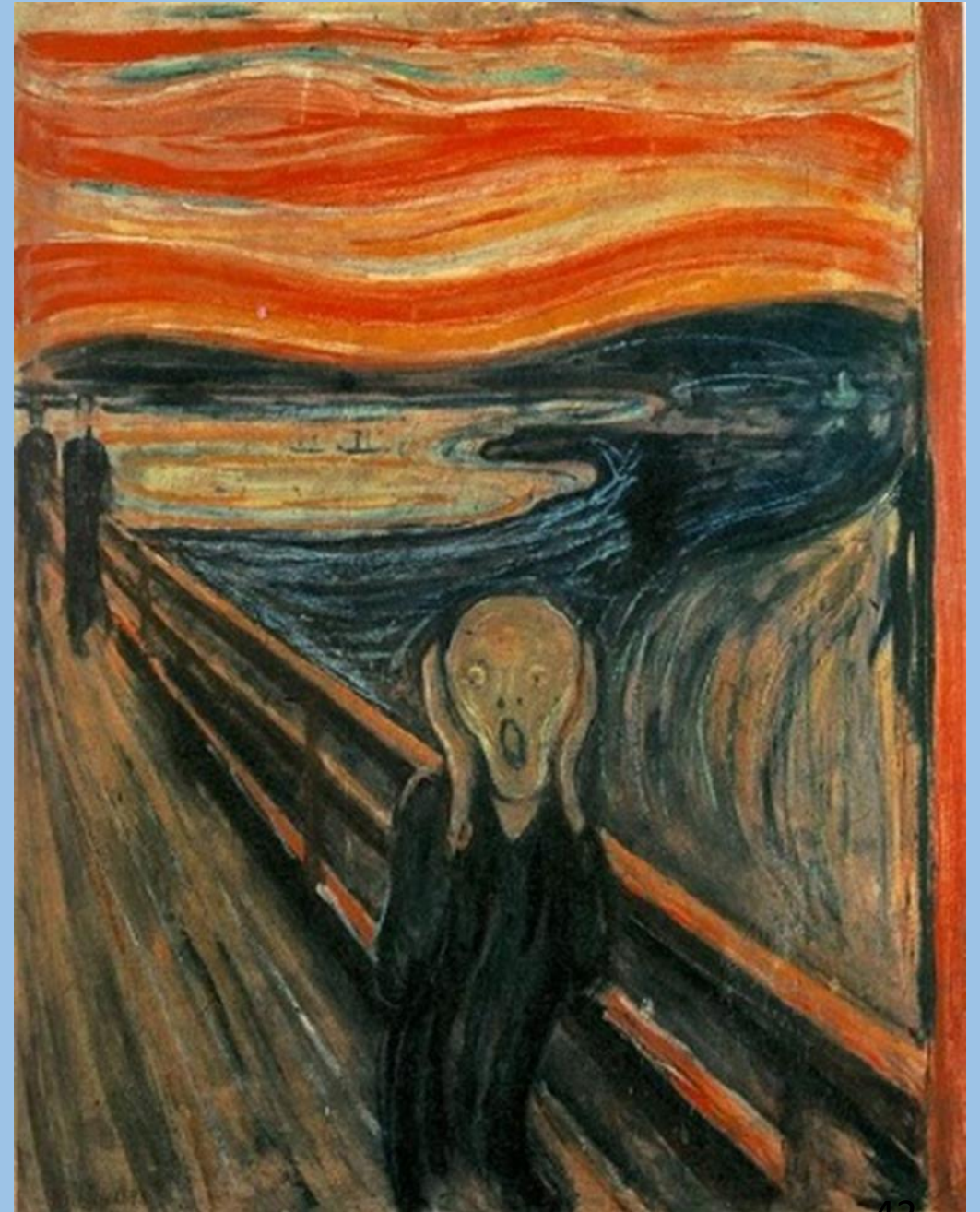
はじめてSustainable Developmentの語

地球は悲鳴を上げている

ムンクの「叫び」とは？

Scream この人は何をしているのか？ -

叫んで居るのではない。
耳を塞いでいる。ムンクは、海岸で地球の
悲鳴を聞いた。
スクリームは「叫び」ではなく「**悲鳴**」



生命圏の破壊

- ・ COP21

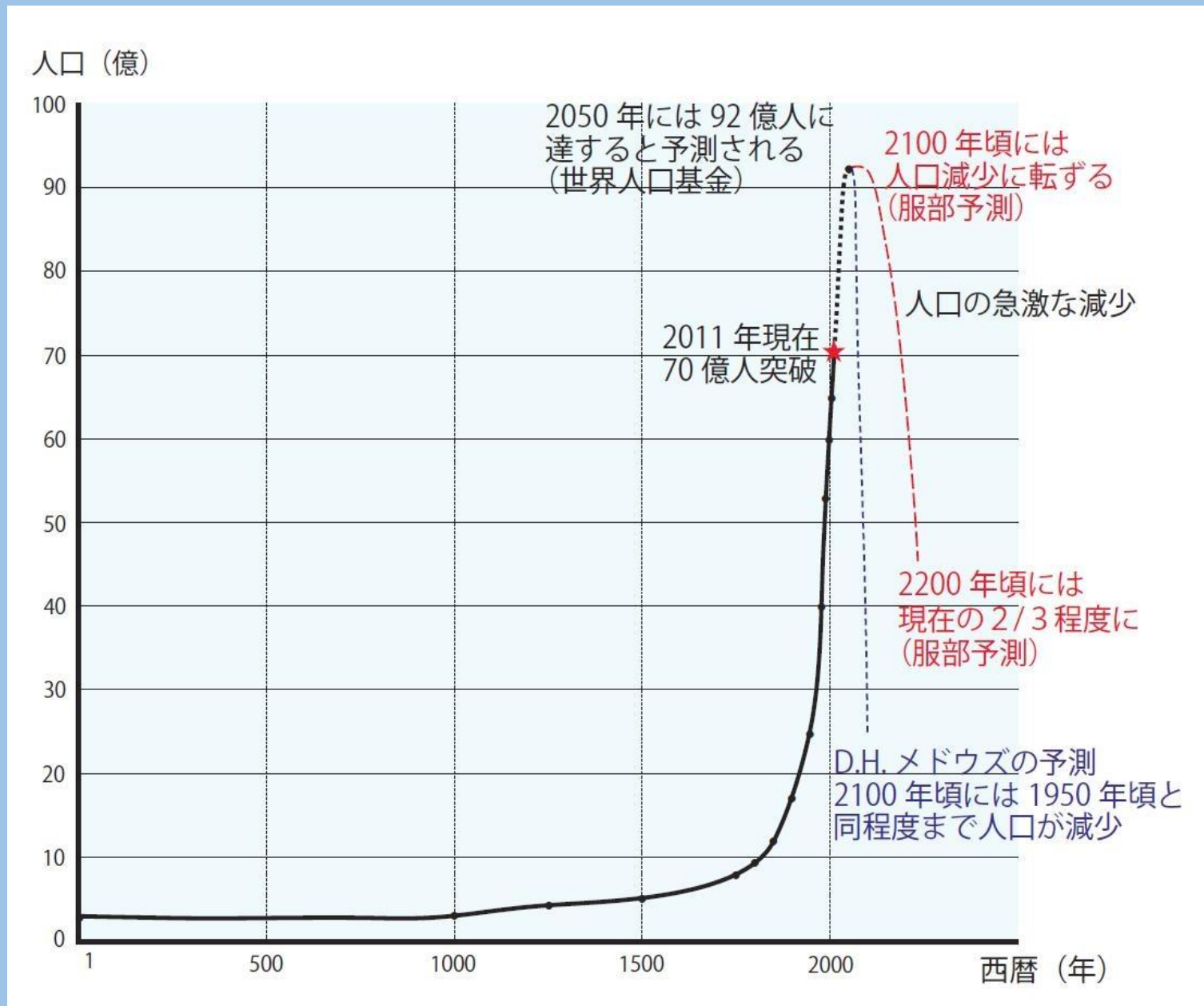
産業革命前に比べ、気温があと2度上がれば地球環境は取り返しがつかない不可逆点（J.RockstromのいうTipping point）に達する

- ・ 人口 1972年—40億
2020年—78億
2050年—97億（？）

- ・ エコロジカル・フットプリントによると、現在でも地球1.5個が必要

新興国がアメリカ並みの生活を欲すれば5個必要

※ 2030年までに上昇可能な全世界の平均温度は0.2度のみ



◆長い20世紀に世界人口は4倍になった

自然との離婚

人類史の20000分の1の時間帯に起こった異常事態

デカルトのCOGITOの罪、主客の分断。

自然の一部である人間が自然を客体とし非生命化した。

「非人格化した」（フランシスコ教皇の表現）

70パーセントの森を破壊した人類は、ついで森の墓場に手を出す
——→化石燃料の発見——→**人口爆発**

予測：2100年頃、異常な人口爆発は地球環境劣化により減少に転じる。
激しい痛みを伴った減少が予測される！

自然との離婚と所有の文化

- 17世紀の科学革命
- 自然は非生命化され人間のための〈資源〉となる
- エデンの園での蛇の予言どおり、「神のごとく」になった
- **Cogito——デカルト的理性の目は「神の目」**

デカルトの目

- 生命誌の体系から抜け出る
- 自然との「離婚」
- Cogito——デカルト的理性の目は「神の目」
- 抽象的な存在——人間のAbstraction





【生命誌絵巻】 協力: 団まりな 画: 橋本律子

45億年の地球史では過去に5回の生命大量絶滅が起こっている。そして今、第6回目の大量絶滅がささやかれるに至った。

この第6回目の大量殺戮はそれまでとその本質を異にしている。

これまでの絶滅が隕石の衝突等の自然災害であったのに対し、今起ころうとしているのは、人類という一つの生物種による母なる地球の篡奪という自殺的犯罪的行為。人間圏が生命圏を脅かす異常事態。

- 問題の核心には「人権」という言葉と同様、国連でも批判することが許されない「進歩」
Progressと「成長」Developmentという言葉が隠されている。SDGsという時も、そのD を経済成長とし、**Sustainability を地球環境の維持と理解していない人が多い**
- 直進する時間論
- 経済的成長 = 人間の成長、とするパラダイム

CCは もはやClimate ChangeではなくClimate Crisis

「人類は地球に戦いを挑んだ。地球は必ず反撃する」

（グテーレス国連事務総長）

「自然は人類に反撃すべく無言のうちに再結集しはじめている」

（ミッシェル・セール『地球との和解』にて）

東南アジアの大洪水・オーストラリア・カリフォルニア・アマゾン等の消えない山火事・日本を襲った巨大台風・アメリカの巨大竜巻・アフリカの干ばつ・砂漠飛びバッタの大量発生・シベリアで38度等の異常気象・北極、グリーンランド等の氷の消滅、永久凍土の氷解、生物多様性の減少、等々。

この中で新型ウイルスの発生。

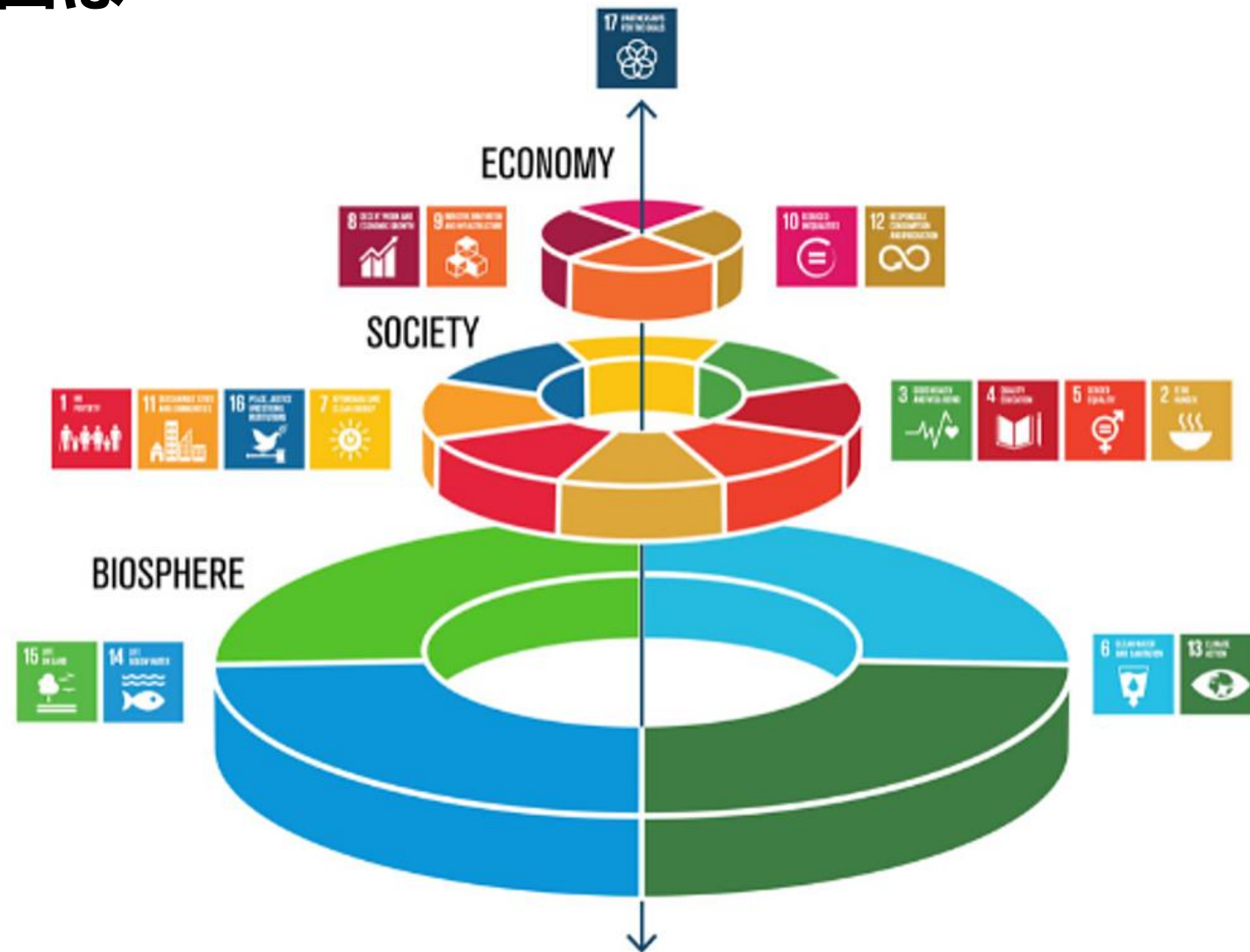
**このままでは2100年には気温は4度上昇の予測もある。
地球は灼熱地獄となる。**

◆SDGsへの問い



ではなく…

◆見るべき図は…



◆地球環境問題の解決がすべての土台、社会・経済問題はこの土台があつてこそ

◆直進する時は、世界の時間なのか？

- 1993年 ロカルノ シンポジウムでの服部発言
- 『西遊記』における孫悟空の冒険一仏の掌を出ず
- ヘーゲル・マルクスの歴史哲学－『神の国』（アウグスティヌス）を出ず
- 直線的時間論はヘブライ・キリスト教の特徴
- 近代文明の**progress**という価値は、この時間論の**paradigm**
- バイブルにも描かれた「終末論」**eschatology**を忘却

◆循環する時

- ・ 2005年、パリ・シンポジウム「通底の価値」での
オドン・ヴァレ（比較宗教学者）の証言

「イランを境にして、西に直進する時、東に循環する時があった。その直線は右肩上がりの線で、**循環はらせん状**であった。」

客体ではなく、主体としての自然の認識 ——人類本来の知恵

- ・ 梵我一如（ヴェーダ・ウパニシャッド）
- ・ 草木国土悉皆成仏（仏教・天台本覚論）
- ・ 人も自然も神の被造物（キリスト教）
- ・ タウヒード（すべては神の顕現、一即多・多即一、イスラーム）

「なにごとの おわしますかは知らねども かたじけなさに 涙こぼるる」
（西行）

——自然とは、じねんするもの
オートポイエーシス（自己創出）する
＜いのち＞のネットワーク
すべてがすべてと繋がっている

Network of interdependence

——宇宙は関係性の中で、調和を持って生成する。

悪とは：

「関係性の崩壊」（スピノザ）

「自然の調和を崩す行為」（バンクーバー宣言）

大自然の關係性を断ち切る行為は、犯罪。

．．．有明海・諫早湾はその一例。

一度動き出したら止まらない行政の問題。

自然の再生への貢献者

- ・ C.W ニコルさん：ウエールズ系日本人と自称。
長野県に里山を再生。
- ・ 畠山重篤さん：森は海の恋人運動（田中克教授も推進）

所有の文明＝力の文明

権力を持つ、金を持つ・・・

植民地を持つ・・・

持つものとは、自己の外にある物＝客体

Anthropocene（人新世）は、20世紀に始まったものではない。17世紀、科学革命と共に始まった

「人類世（服部訳）」 ――― 地球を人類が支配

警告した人々の声もあった

“Man, the child of Mother Earth, would not be able to survive the crime of matricide if he were to commit it. The penalty for this would be self-annihilation” (Arnold Toynbee)

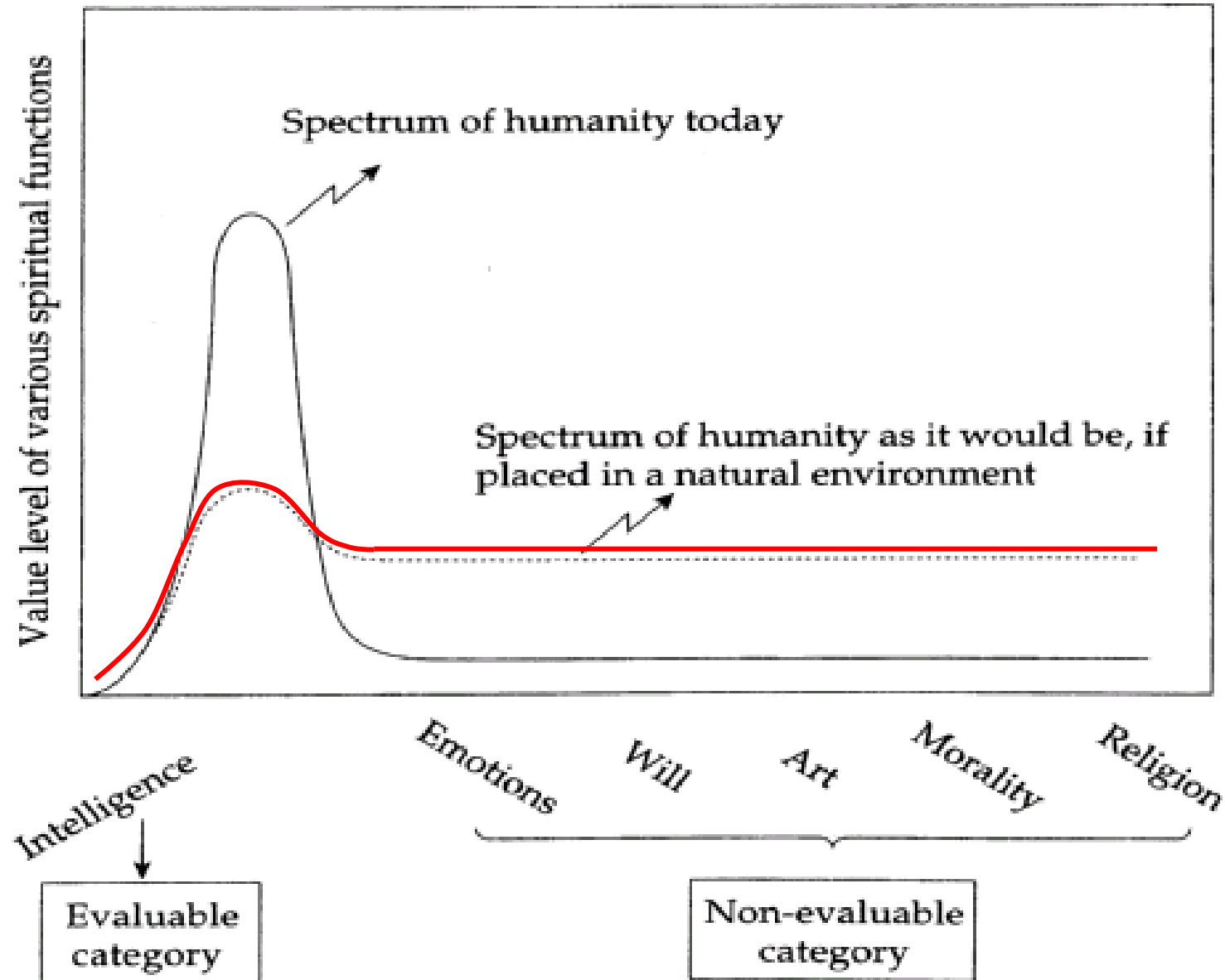
「母なる大地の子たる人類が、もし母親殺しの罪を犯したならば、もはや生き残ることはあるまい。その罰は自己崩壊であろう。アーノルド・トインビー」

21eme siècle sera spirituel ou ne sera pas. (André Malraux)

「21世紀は精神性を取り戻さねばならぬ。さもなくば、その世紀は存在しないであろう。アンドレ・マルロー」

・ 20世紀に理性至上主義に反省を促したアレクシス・カレルの図

Fig.1 Unbalanced tendency of value system appearing in humanity today



©Alexis Carrel

循環の思想

- 最近問題とされる言葉 – Sustainability
- 「我只足るを知る」(竜安寺の「つくばい」)



- 自然を所有物として客体化する理性ではなく、自然の中にあって、人間本来の感性・霊性、そして自然の声と共振する理性を再発見する
- 循環の思想は実は地球上に遍在
マヤ文明、エジプト文明、チベット文明、ケルト文明、エーゲ海文明
- 西太平洋の豊穡の三角地帯に生きてきた水の循環の思想、水に「大いなるいのちの循環」を見る諸文明
- 循環の思想は「**とこわかの思想**」とも表現されよう
- セルジュ・ラトゥーシュのいう「脱・成長」（Décroissance）
- **主客二分論（Dualism）の打破こそが最大の課題**



宇宙的いのち

- ガブリエル・マルセル（伊勢での体験を筆者に語る）
「ここでは人間は自然ともコミュニオン（合体）できることを知った」
- アンドレ・マルロー
「伊勢神宮はピラミッドよりも、カテドラルよりも、雄弁に永遠を語る」
- アーノルド・トインビー（伊勢神宮にて）
「この聖なる地で、私はすべての宗教に通底する一なるものを感じる」

- 西谷啓治
「父母未生」 宇宙的いのちの深みへの回帰
- 石牟礼道子
「生類（しょうるい）に寄り添って生きる」
- 鶴見和子－曼荼羅の思想
「異なるものが、異なるままに、互いに補い合い、助け合って、共に生きる道」

多様化するわち「進化」は相互扶助の歩み

蜂と神様

蜂は お花のなかに

お花は お庭のなかに

お庭は 土塀のなかに

土塀は 町のなかに

町は 日本のなかに

日本は 世界のなかに

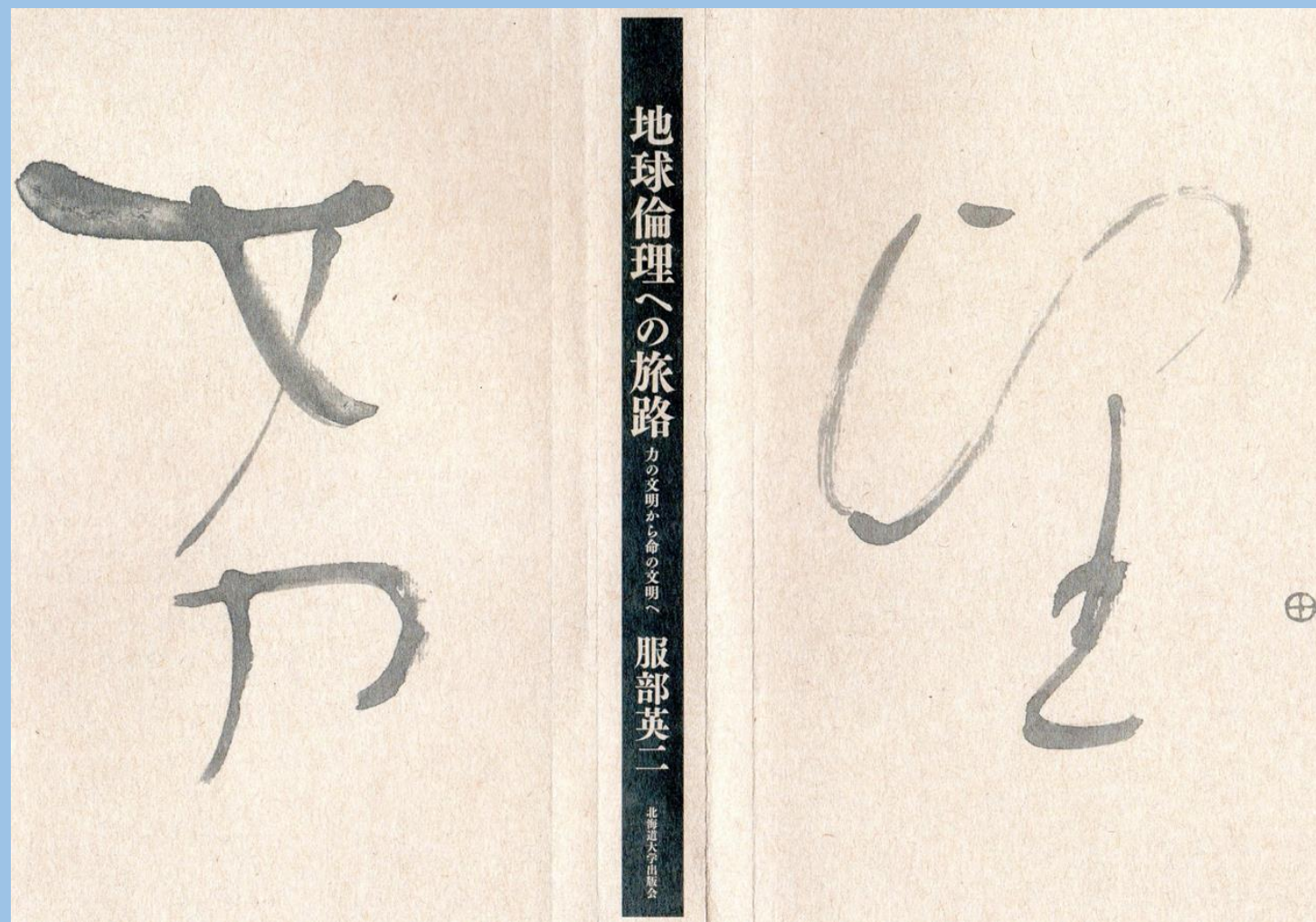
世界は 神さまのなかに

さうして、さうして 神さまは

小ちやな 蜂のなかに

©金子みすゞ

パンドラの箱の底に残ったもの



——希望—— (町春草書)

◆参考文献

